

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-08-03

鼎談 法政大学を語る：回顧、そして展望

KATSUMATA, Hiroshi / 西野, 春雄 / Horie, Takumitsu /
NISHINO, Haruo / 堀江, 拓充 / 勝又, 浩

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

79

(開始ページ / Start Page)

4

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

2009-03

〈鼎談〉

法政大学を語る―回顧、そして展望―

勝又 浩

(文学部教授)

西野 春雄

(文学部教授・

能楽研究所所長)

堀江 拓充

(文学部教授)



右から勝又、堀江、西野。

二〇〇九年一月一八日に、記念特別号企画として、退職される勝又浩先生と西野春雄先生、および堀江拓充先生による鼎談を行いました。なお、この鼎談には藤村耕治先生、小秋元段先生も同席されました。(編集部)

入学した頃

堀江 二方とも、今年三月末で退職となり、淋しいかぎりです。年次違いの法政の日文出身ですが、勝又さんは学部入学は何年でしたか？一九五七か八年じゃない？

勝又 高校を出てから四年間働いていたから、一九六一年でした。二部に入学して、それから大学院を入れて一三年在学しました。

西野 私は入学したのが一九六二年。

堀江 六〇年の第一次安保闘争後の学内状況や雰囲気とかは？

西野 僕はね、それとは入れ替わり。それ終わった後ですね。

勝又 まだ空気が残っていたけれどもね。ちょうど気の抜けた時期だったね。六〇年安保の残党がゴロゴロいたよ。

堀江 どうしてあなた方が日文科を選んで、近代文学、あるいは能楽を選ぶことになったのか聞かせてもらいたいな。

勝又 まあ、文学がやりたかったからね。私は二部だね。勤務には一番条件がよかったの。早稲田に行きたい気持ちもあつたんだけど、仕事先に早稲田に通つてるのがいて、早稲田は二部の授業が四時半から始まるので、彼は早退しな

きやんなかった。これでは通えなくてね。だから無条件で法政。あと、早稲田より法政の方が、学費がずいぶん安かったんだ。で、文句なしに法政の二部。

西野 私は絵描きになるつもりでいたんです。中学、高校と版画や絵ばっかりやってたの。「卒業三人展」なんていうのもやって。デパートの画廊のおじさんが理解のある人で、卒業展をやってくれたの。でも俺はこれで暮らしていけるのかなって、自信がなくなっちゃった。その一方で、私の九つ上の兄が法政の経済を出てたので、「法政大学」がインプットされて。募集要項を見てたら、おもしろそうな感じがしてね。詩や物語も好きだったから、国語の先生になろうかなと思って、それで八戸から出て来たんです。

藤村 能をやるうということではなかったのですか。

西野 いや、全然。絵ばっかり描いてたんだから、文学の勉強なんてしてない。小田切秀雄先生の「文芸学概論」や広末保先生の「文学」で洗礼を受けたんですよ。

堀江 あの頃、「文芸学概論」担当してたの、近藤忠義さんじゃないの？

西野 それは「文芸史」。小田切さんが「文芸学概論」。一年か二年だったか、夏休みの課題が北村透谷の「人生に相渉るとは何の謂ぞ」だった。それは今でも覚えているね。また近藤さんいろいろなことを話してくれて、我々をインスパイアするとうか、アジテートするとうか、「歌舞伎を観なさい」「能を観なさい」「関西に旅行しなさい」と煽られて。いろいろな授業に出てるうちに、平家、能、それから浄瑠璃、といった語り物

に関心が向いてきた。その頃ゼミは三年からだっただけけど、ゼミ選択に迷ったんで、先輩に相談したの。そうしたら「迷った時は、教員で決めるのもいいよ」と言ってくれた。で、全然授業とったことはなかったんだけど、表章さんが若くて、厳しいというものだから、「じゃあ、とろうかな」と思ったのが、運のつきだよ(笑)。厳しいのなんのって、ひどい目にあっちゃって(笑)。

堀江 勝又さんの場合、ゼミ決める時はどうだったの。

勝又 僕の場合は法政に来る前から、小田切秀雄を読んでたから、その点迷ったことはない。

堀江 あの頃、猪野謙二さんもいたよね。近代は猪野、小田切、小原元さん。

小秋元 その頃、一部と二部では教員が違っていたという話を聞いたことがあるのですが。

西野 いや、私たちの頃は同じでしたよ。

勝又 非常勤の先生は違っていたけど。源氏物語の秋山慶先生は二部だけ。二部だけってことで、僕らにとってはうれしい、自慢の先生だね。秋山さんにはかわいがってもらって、ごちそうもしてもらったんだけど、秋山さんは重友毅さんに呼ばれて来たって言うってたね、近藤さんじゃなくて。

西野 一部の主任が近藤さんで、二部の主任が重友さんだったから。まだ重友さんがいらした時代ですね。

堀江 ゼミ決める時、近代も現代もろくなのがないんで、どうでもいいや、「雨月物語」を読むため重友さんのところに行ってみようかと。

西野 堀江さんはね、中世にも出てくるの。表さんとこで一一緒に勉強した。

堀江 重友さんも権威的のただけでだめだと思つて、四年は能を讀もうと、表章さんでいいやつて。

藤村 堀江先生は「小田切先生の所には行けなかつた」とおっしゃいますけれど、それはなぜ？

堀江 大げんかしたんだよ、一年生の時に教室で。小田切さん、広末さん達がいらつしやるので、法政に来たのにね。六〇年安保の問題について「あなた方は共產党で何やつてたんだよ」つて。そしたら、「おもしろい、徹底的にやるう」つてことになつちやつて。

学問の方法

堀江 教育学科の岡崎さんの葬式だったかな、地方に行つて、益田勝美さんと表章さんらと帰りに研究方法とか創作方法について話したことがあつた。益田さんがね、「表さんのはガチガチの書誌学だけれど、これは残るよなあ。しかし、自分とか小田切さんとか堀江くんのかなかは泡のようなもので、これは残らないわなあ」なんてことをおっしゃつてたことがある。歴史社会学派では近藤忠義をはじめとして、方法論をいろいろやつただけど、あれを勝又さんと私なんかは「潰す」という程積極的ではないにしても、受け継がないというやり方で方法論を考えた。どうですかね、その辺は。

勝又 うん、僕もそう。歴史社会学派の学校に育つたけど、歴史社会学派なんてもう常識になつていたからね。別にそんなも

のにこだわる必要もないし。僕らは、そういう方法論が次々と時代とともに終わるのを見たつもりでいる。もしやるのなら、方法論を全部持たなきゃいけない。でも僕は、結局、文学は無手勝流しかないと思つてる。方法論が時代を切り開いたという面は否定はしないけどね。それは、国家に強いイデオロギーがある時には有効なんだよ。今みたいに、ない時はねえ。

堀江 そうそう、暖簾に腕押しみたいな感じで、ね。

勝又 歴史社会学派っていうのは学問的方法論であると同時に、生きる思想だったからね。その後、日文協に二年か三年つきあつたけど、歴史社会学派の残滓みたいな連中はつかりでさ、あきれかえつた。

藤村 方法論的にも停滞しちゃつたつてことでしょね。

勝又 要するに、進歩的な姿勢をまねしてるとつていうかね、なぞつてるだけ。益田勝美までは本物なんだよ。あとは亜流。で、法政で僕が仕入れたのは日本学という学問。育てられたのはね、益田、広末、小田切秀雄。彼らはインテリジェンスの桁が違うよ。

堀江 西野さん、表さんがよく言つてたけど「我々が越える対象は『3N』だ」と。

西野 ああ、言つてた言つてた。3N—西尾実、野上豊一郎、能勢朝次。もう一人、野々村戒三を加えると4N。

堀江 表章さんはその3Nをどうやつて越えるか、ということを考えてのだけれど、あなたの場合は、越えるとしたら表さんとその他には誰かな。

西野 いやいや、越えられない。憧れの先生はいるけどもね。

横道萬里雄さん。

堀江 横道さんは表さんと違って、もうちょっと文学的な。

西野 文学的だし、楽劇的、芸術的。対照的ですね。で、その横道さんが始めた能楽技法研究会が―実技と理論を学ぶ会なんだけども―私が大学院二年の時に始まったの。表さんに「君、それに行け。これからは、能の技法も勉強しなきゃだめだ」と言われたんだ。自分とは別の道だけどね、と。松本雍が一年遅れて卒業したんだけど、一緒に行けて。三五歳以下で研究・

評論・制作を志す人間を育てたいということで、横道先生が都内の先生方に「推薦してほしい」と趣意書を配ったの。芸大や早稲田などからいろんな人が集まったんですよ。謡の「ウ」の字も知らない人間が理論と実技を、三年間、毎週水曜日の四時から九時まで。もう、つらくって。その日だけは能研を早く出ていることになってるんだけど、落ち着かなくてね。上野の文化会館で紅茶飲んで、少し気持を落ち着かせて、それから行ったんだよ。で、できなくてねえ。終わってからは、またみんなと一緒に上野で飲んで。そういう三年間だったんだけど、それで終わらなくて。もつと学びたいと、ずっと続いたんです。まあ、初め二〇人ぐらいいたのが、だいたい脱落して、最後残ったのは五、六人しかいなかったけど。その五、六人というのが松本雍、羽田昶、それから蒲生郷昭、蒲生美津子。みんな『能の囃子事』っていう本も出した。共同研究のつらさもおもしろさも体験したね。二〇数年かかっちゃって。表さんからは「もつと早く出せないのか」って、いつも言われたけどもね(笑)。

勝又 表さんを入れたのは西尾さんなんだけど、それはなぜか

というと―西尾実さんやその他の人たちは世界学、日本学というのを視野に入れて、仕事するわけだよ。だから、表さんみたいな、書誌学的解釈学的な、基礎をきちんとやる人を法政にちゃんとはめたわけ。そこが偉いところ。

堀江 だから、益田勝実さんは、さっき言ったような解釈をしているわけだね。

法政大学の変化

堀江 「法政が変わった」という話によく聞くけれど、あなた方から見て、どうかな。六〇年代の教育・研究環境と、それ以降の、七〇年代の第二次安保闘争であれだけ破壊されておかしくなった時代、八〇年代のバブル期、九〇年代の空白の一〇数年間。そういう法政の非創造的な変遷を見ながら、あなた方は学生として教員として、何を考えてたのか教えて下さい。ここだけは押えておかないと、ということありますか。

勝又 今、いろんなことがひっかかるんだけどさ。家にいると世界情勢の話が耳に入ってくるわけじゃない？ で、人類はどこまで駄目になるかな、と思ったりしてね。こないだ浦田くんがエジプトに行ってたそうだけど、一日に五回、アラアの神に礼拝するそうだね。その辺だと、イスラエルとかからいろんなことが響いてきているとか。そういう中東とかアジアとかの宗教の強い国が、今では戦争の中心地になっている。一日に五回拜んでいる信仰心の強い人たちが、ひるがえって、自分たちの文化、民族の誇りをもって戦う。あれは民族戦争だからね。それで、アメリカはイスラエルばかりでしょ。人類の平和を考

えたはずの宗教が人類を滅亡させていく。

堀江 それは大昔から。十字軍やら、ありすぎる程ある。

勝又 まあ、それはそうなんだけどね。で、ああいうところがどんどん力を持つだろうな、アメリカはどんどん凋落するばかりだろうな。しかし経済の形というのはアメリカ型で進んで、日本は比較的、アメリカ型にならないで済んだのが、小泉以来、どんどん駄目になって。そこへもってきて、中国が日本よりもアメリカ型を徹底していく。民族的にはアメリカとそっくりなんだから。日本なんかたちまち追い越されてさ。で、そういうの中に、今、日本があり、大学があるなということも思いうわけ。

堀江 大学の高等教育機関としてのあり方だね。

勝又 我々が「これが法政大学」と認識していた時代と今とでは、インテリジェンスのレベルが全然違うんだよ。元総長の経済学者の大内兵衛だって、三浦荘の食堂に飾ってあるけど、筆で『徒然草』を揮毫するような人だった。そういうものがみんな壊れて、専門的な知識だけ抽出して、効率主義の教育はっかりやって。それを煽るのが文部科学省だよ。これを壊さなくちゃ、どうしようもない。

堀江 文科省は、ない方がいい。他で代替できる。

勝又 財務省を壊して、文部科学省を壊して。そうすれば法政はよくなる(笑)。

堀江 五〇年代の終わり頃、若者が高等教育機関に進学するのはせいぜい二割程度でした。六〇年代になって、全国平均でだいたい三割近くなった。大学側が定員を増やすももちろん法政

も膨大な学生定員を設置する。大学教育の大衆化が始まった。

学問の大衆化が本当はもつと異質の型で進展すればよかつたんだけど、「墮落」を始めた。そういう時期の学生だよ、我々は。

勝又 僕は初めて専任教員になったのが短大だけど、行ってみて驚いてね。五日間もかけた北海道旅行に我々が付き添うわけさ。小田切先生に「短大はレジャーランドでした」と手紙を書いたら、返信に「大学はレジャーランドじゃないかい？」って(笑)。先生は痛烈にそう感じてたんだよね。象徴的に言えば、

我々の頃には大学の門の左側に靴磨き小屋があつて、学生が靴を磨いてもらつていた、あるいは校舎のエレベーターに「エレベーターおばさん」がついていた。それが「大学」だった。マンモス化してもね。大学生自体もそういう扱いを受けてた時代。あと、五八年館のピロティに、いつもピラが出ていて「下駄で登校したものは、庶務に行つてスリッパに履き替えるように」って書いてあつたな。新校舎を下駄でランラン歩かれちゃ、授業の邪魔になつてしょうがない(笑)。しかし、下駄がそれだけいたつてことだな。

堀江 僕も下駄だったよ。

勝又 まあ、僕らの時代にそういうのがどんどん崩れたけど、最後の雰囲気はまだいくらか残つていたね。以降は、それ以前の人から見れば「大学じゃない」ってなもんだよ。

堀江 法政の場合は学生紛争が六六、七年、他の大学より二、三年早く始まつた。教育、学問の両面から大学じゃなくなつてきたのは、その頃からだろうね。

西野 その頃からでしょう。僕が大学院の時はその真つ最中だ。

教員になっても真つ最中。教員になった途端に、今度は学生と対峙する側に回っちゃった。うちの弟とも会ってるんだよ、経済学部だったから。「お前、なんでここにいるんだ」なんて。堀江 結局、知的な指導力、探究心がなくなった。教員、学問、あるいは当時のジャーナリズムをはじめとする知的な部分が、もうすでに機能しなくなっていた。そういう状況は、最も早く大学に反映されますから。

大学・大学院・研究所の役割

堀江 西野さん、あの頃はまだ研究所も少ない時期ですね。研究所独自の目的や教育機関としての研究所の役割という問題について、いろいろ持論があると思うんだけど。

西野 そうですね、能楽研究所はユニークな研究所で、他には生まれていなかったんです。その頃は組織として教育にかかわることはなかったですね。ただ文学部付置でしたから、我々は個々に文学部や大学院の授業を持って、ゼミや卒論や修論の指導をしていました。研究所として組織的に後継者を教育する、研究者養成プログラムはまだなかった。それは近年のことですものね。ただ、能研で勉強したいという人は学外にも、いっぱいいましたので、個々の所員の裁量で指導したり、外国からの研究者を受入れたりしていた感じですね。

堀江 それはいいのか悪いのか、その辺どう？

西野 組織的にきちんとやれる方がよかったですけどね。でも、能研は濃密にいろんなことを勉強し切磋琢磨できる場所であったと思いますよ。能研で勉強した人たちは国の内外にい

らっしゃるし、その人たちが研究をリードしています。それから近年は国際的な広がりが見えなくなってきましたね。

あと、研究所は教育機関としての面もあるけれど、対社会的なつながりが大きいんです。幸いなことに、私が大学院に入った頃、能楽懇談会の事務局が能研にあったので、片桐登さんに言われるまま、例会の案内を出したり、講師の交渉をしたり。昔の私学会館でだけど、毎月の例会ごとに「今月の新刊・新着図書」として、能楽関係図書を持って行ったり、研究部会で伝書を輪読したりしていた。そういうところから、いろんな人とのつながりができてきたのが大きい。教育だけでなく、「能楽社会」というんですか、能を支える人たちとの関わりが持てた。堀江 では、大学院の役割についてはどう思いますかね。何か思い出に残っていることはある？ 旧大学院棟は西日が暑くって、どうしようもない建物だったな。

勝又 僕に言わせれば、大学に入ってくりゃ、あと大学院なんかに行かなくても同じ資格取れた、っていうか、つまり人間として「大学生」だったんだよね。中野重治みたいな。

堀江 旧制高校から旧帝大の学生なんかは若者の〇・数%しかなかった。ウルトラエリートを育てたらしいというシステムだから、旧体制下では機能していた。法政大学も、学生の構成からしたら二、三割の者がものすごい優秀な連中だった。五〇年代から六〇年代にかけてもそうだし、それぞれの分野で、いい仕事をしていった。

勝又 それが大衆化社会になってから、お尻を叩いて勉強させないと落っこちる奴がいっぱい出て来たわけだよ。大学なんて

籍あるだけで、あとは下宿で好きな本読んでれば卒業したんだけど、そういうレベルが大衆化時代の中で完全に壊れて。それを象徴するものがいっぱいあってね、例えば、小田切先生は「岩波文庫を一日一冊読みなさい」と言ったんだけど、そういう基準が今、世の中にないわけ。だから、今は大学で「卒業までに、このスキルを身につけなさい」という時代だろ？ で、そういう大衆化社会の中、お尻叩いて毎週小テストをやつてあげて、というレベルに対して、僕らは切り替えてきてない。藤村くんたちはそれを切り替えてやつていかなきゃいけないんだろうなあ。

藤村 もう、半分切り替えてる感じはしますよ。

堀江 昨日、僕のゼミの卒業生で新入社員の教育をしているのがやつて来て、「大学を卒業したつて、結局、何にもわかってない。大学は何をしてるんだ」と(笑)。

藤村 「文章は書けない、漢字も読めない、書けない。こんなのを卒業させるな！」と言われましたよね(笑)。

勝又 大学院も先生から教わる場所じゃないよ。先生と雑談してりゃいいわけ。

藤村 今は、大学院でも「教わりたい」なんて言う院生がいますからね。

勝又 今さ、書店にあふれている本は週刊誌記事を一冊にまとめたようなものばかりだよ。出版業界が不景気だっていうけれど、売り上げ額は結構維持してるわけじゃない？ しかし、中身は週刊誌レベルの薄いものばかり。新書だつて、岩波新書は必読書だつたけど、今は養老孟司の「語りおろし」。こう

いう時代なんだよ。全体のレベルが下がっている。学問的なものとか純文学とかが落ち込んで、そういうのは隅に追いやられて。僕らはそっちの方ばかりしか見ないわけだけど、でも、そうした全体のレベルの下がってる中で、今の学生は育ってくるんだよ。だから、僕らが彼らに「本物はここにあるよ」ということを見せる、そういう教育の仕方しかないだろうなあと思うね。

国文学会・『日本文学誌要』のあり方

堀江 我々が就任してから、『日本文学誌要』を復刊したんだけども、今度でもう七九号。小田切さんが、彼らがやっていた第一期のものを全部下さったのだけれど、『日本文学誌要』は言ってみれば、歴史社会学派的方法的な、一つのメルクマールを示すようなものだったんだよね。

勝又 戦後ずっとね。

堀江 復刊の頃は古い人ばかりだった、手伝ってくれた人がだから、復刊の頃の『誌要』と現在の『誌要』の役割が違つて来て当然だけれど、その辺はどうですか、観察していて。

勝又 今は研究イデオロギー云々という時代ではないから、それを除くとね、『日本文学誌要』は割合に堅実にやつて来て、学問的伝統は残っていると思うね。話をちよつと広げるけど、文学や文学者の戦争責任という問題で、戦後、日文協ができたわけだよ。しかし僕が日文協に加わるようになってみて、「これは日文協の戦後責任だなあ」と思った。日教組の戦後責任があるように、日文協の戦後責任というものがあるな、と。で、

歴史社会学派があつて近藤忠義の時代まではその意気があつたけれども、残念ながらその後は時代遅れになるばかりで、ひっくり返せば『誌要』は戦後責任がないな』と思う。そういう意味だね。

堀江 当時は、近藤忠義よりも小原元が比較的きちつとやっていたんじゃない？

勝又 主任がやつてたよ。僕が助手の時にね、二号か三号分、編集させられた。

藤村 最初、『国文学誌要』が出ましたよね。近藤先生を中心とした、まさに歴史社会学派の最初のものとして、『日本文学誌要』の復刊の時期というのは、いつ頃ですか。(編集部より復刊第一号の目次と奥付を提出) 一九五七年刊、執筆者に小原元先生がいて、代表が近藤忠義になっていきますね。

堀江 その後、刊行が一回途絶えるんだよね。

ところで、卒業生で国文学会にある程度関心のある人は、『誌要』をはじめ、これから国文学会はどうなっていくんだらうと心配していたりすると思うんだけど、どうかな？

勝又 それはいつも話題になるけれども、国文学会が学会であると同時に同窓会である、そこをどういう風に保つていくかということにつきると思うね。

堀江 僕は、再々刊の時かな、『誌要』の特集で鈴木和雄さんたちと、草創期の頃とか国文学会の来歴を全部掘り起こそうとしたことがあるんだ。二、三号続けたんじゃないかな。でも、今、おそらく日文学の学生たちは、法政の、そして日文科の伝統や歴史というものをほとんど知らないと思う。そういう時、僕

らは何ができるのかな。

藤村 我々の学生時代も、私とか大学院に行こうという奴は興味を持って読んでましたけど、まわりの友達見てても、『誌要』なんて興味なさそうでしたよ、その頃すでに。でも、我々にとつては『誌要』に載るといふのはすごいこと。私が初めてもらった『誌要』に四年生の論文が載つて、「すごいなあ。学部生なのにこんなところで活字になるなんて」と思いましたよ。

勝又 『誌要』に四年生の論文が載つて、「すごいなあ」と思う学部生が今、一割いないだらう。自分には関係ないんだ。同じゼミ生の卒論が載つかつて、初めて「あ」と気づくくらい。

藤村 『誌要』は教員や大学院生のもので、自分たち学部生が寄稿してどうこうできるところじゃないという認識じゃないですかね。

勝又 僕ら学生の頃は、「知識人の責務」なんて小田切先生が書く時代だけど、今、教室で、「大学生は知識人か。知識人、手をあげてみる」って言ったら、一人もあげなくて(笑)。今の大学生は九九%、自分たちのこと知識人だなんて思つてない。

堀江 知識人というのは、小田切秀雄流に言えば、ちゃんと努力し、知的にある一定のレベルに達することによって批判精神が芽生えていて、学問分野だけじゃなくて、社会へも世界へもそういう「目」を向けることのできる人。だから、現実批判、時代批判、世界批判の中核になるのが知識人だ、と言つてる。でも、これはサルトルや小田切秀雄の時代で終わった。我々の時代だと、知識人だと言ったら、笑い者になる。

勝又 でも、大学以外に知識人を育てる場はないわけだよ、今

だって。僕らの用語で言う、「近代的自我」を作ってもらわなきゃいけない。大学はスキルを学ぶところみたいな風潮が出てきたけどさ、一割でいいから、そういう場を日文科に置いておくことは大事かもしれないよ。『誌要』が学問の場ということと捨てちゃだめよ。たださ、そればかりでも社会においてかれるわけよ。そうすると、同窓会っていうのが大事な要素になつてくる。遠慮なしにもうちよつとやった方がいい、日文でも。同窓会的要素を持つ方が正しいと思うよ。

西野 でも、『誌要』の内容がそういうのばかりになつても困るんじゃない？ 住み分けのために、同窓会通信として『そとほり通信』が出てきたわけ。

勝又 「法政の伝統、ここにあり」ということを、きちんと見せていくべきなんだよ。

堀江 そういうけど「法政の伝統って何」という大問題がある。勝又 そうなんだよね。でも、そういうことを勝手に言えることが「伝統」だよな(笑)。

堀江 逆に、「同窓会意識を撲滅する」というのが法政の長い伝統でもあったわけだ。

勝又 そう、バカにした(笑)。で、時代遅れになつちゃつて。

藤村 だから今、いざ文学部同窓会作ろうとしたら、お金は集まらない、協力してくれる人もいないというわけです(笑)。

勝又 最悪な卒業生をすつと育ててきた(笑)。
堀江 法政も一時、卒業生のカミングデーをやつたけど、そういう視点がないから、ただ集まつただけ。

勝又 創立一二〇周年だって、世間に知れることをやりもしない。ほんと、ヘタなんだよ。

堀江 陳腐な言い方になるけど、非生産的な伝統を壊して、新たに伝統を創る上で何を基軸に据えていくかについて、これから教員と学生と卒業生がしつかり考えていかなきゃ、暗澹たるものになるね。『誌要』をどうするか、国文学会をどうするか、学部の教育体制をどのように構築するか、これらを連動させて、ちゃんとやらざるをえないでしょう。そうしなきゃ、学科・学部・大学の将来展望がますますバラバラになつちゃう。

勝又 笠原淳先生がお辞めになつて、何年になる？

小秋元 田中和生先生がおいでになつてからでも、三年になりますね。

勝又 もうそんなになる？ その時、文芸コースについてはやつたから、今回はほとんどしゃべつてないけれど、やっぱり文芸コースができたのは日文科としては画期的なことであるはずで、これを含めて、国文学会と同窓会ということを考えていくべきと思う。で、無責任に思いつきの提案をするが、同窓生に案内するつもりで、年に一回ぐらい文芸講演会を開いたらどうかね。同窓会兼文芸講演会。昔の夏期講座のように。文芸講演会やつて、懇親会開くと同窓会になるじゃない。

西野 そう、国文学会で夏期講座をやつたね、今はあちこちでやつてるけど。冷房もない時代だから、我々が氷柱を注文して会場に置いたり。外部の先生にも講師をお願いして、835教室がいっぱいになるぐらい盛況だった。

藤村 同窓会という役割でいえば、七月の国文学会総会がそう

いう感じになってますね。それをもう一回やると大変なので、国文学会総会をそういう形にしてみたいかもしれませんが。今は内部の教員や学会員が講演しているけど、また、外部からお呼びすることを考えてもいいかもしれませんね。

小秋元 組織化すると言っても、ゼミ単位なら時々集まることもあるけれど、日文科という単位になると、今、一学年二〇〇人ぐらいいますからね、お互い顔が見えないんですよ。

藤村 文学部って、みんなそうなるんですよ。ゼミで、ある程度先生とつながっている、同期や先輩ともつながっている、そこで満足しちゃってる。だから、国文学会みたいに大きな会にはなかなか来ない。ましてや同窓会なんて、「我関せず」になるんですね。でも、ゼミの中でちゃんとコアなパイプがあるならば、それはそれでいいことかと。

小秋元 それを生かしてやるほかないですよ。

藤村 それを糾合して、国文学会ができればいいかなと。

西野 例えば、就職先のつながりというのかな、マスコミ関係の同窓会だと、「法政大学マスコミオレンジ会」というのがありますよね。あれはすごい勢力ですよ。

小秋元 国語教員の同窓会なら、作ろうと思えばすぐできるんじゃないかと思えます。

藤村 ただ組織を作るとなると、やっぱり事務局の問題が出てきますからねえ。

勝又・西野両先生の今後の活動

堀江 さて、あなた方は、四月からどういうことをしようと思っ

てますか？

西野 僕はこれからは時間的余裕が出てくるだろうから、海外との交流や海外の調査をもっともっと進めたいと思ってます。で、これは夢ですけど、ヨーロッパのどこかに能のセンターを作りたい。例えば佐渡の使っていない能舞台を譲っていただいで建てて、付属の研究機関を作る。そこを中心にして、欧米の研究者が集まって研究会やワークショップもできる。そして一流の能役者を呼んで、能を上演することもできる。そういうヨーロッパのセンターを作りたいと思って、国際交流基金の方に相談したら、「それはいい提案だ。自分も考えているんだけど、その例としては、フランスのアルザスなどでシンポジウムを開くのもいいんじゃないかと。私はベネチアもいいと思ってる。

何故かという点、能が最初に海外公演をやった場所がベネチアなんです。昔の円形劇場の跡でやってるんですよ。で、ベネチア大学が一つの受入先になればいいんです。あそこのポナベントゥーラ・ルベルティさん——若い浄瑠璃研究者ですが、ずっと交流を続けてますから、彼と組んでやるのもいいかなと思ってるんですよ。

堀江 テレビで、ギリシヤの円形劇場で能をやっているの観たけど、あれも結構感動させたようだ。やっぱり、「世界の中の」という考え方でいかないと、これからはどうしようもない。

勝又 でも不景気になっちゃったから、企業が金を出さないね。

西野 そこだね(笑)。だから、ちょっと待ちなさいって言われているんだけど。で、コアになる役者は浅見真州に決めて

るの。二人でやろうと。ま、あせらずにね。

勝又 シェークスピアの文献研究が日本で盛んならだつて。逆
に、能の文献研究も海外でずいぶんやるようになってるんじゃない？

西野 なって来ていますよ。そのいい例が、今回、観世寿夫賞
をおとりになったプリンストン大学教授のトーマス・ヘアさん
世阿弥の芸術論を英訳したの。ちょうど一〇〇年前に吉田東伍
が『世阿弥十六部集』を出し、世阿弥の芸術論が活字になった
のです。その後、一九二一年にアーサー・ウェイリーが世阿弥
の芸論を紹介したり、翻訳したりすることによって、それが欧
米に広がった。同じように、トーマス・ヘアさんによる世阿弥
の思想の全訳によって、さらに広がっていくんじゃないかなと
思っています。外国の人たちが安心して頼れるテキストを作っ
たり、解釈したりというのを、これまでは日本の我々がやって
たわけ。でも、今や土俵が同じになつてくれば、もつといろん
な発想で見えてくるかもしれない、共通の物が生まれてくるか
もしれない。そんな気がしています。トーマス・ヘアさんの素
晴らしいところは文献だけじゃなくて、その背景となるものが
身についているところ。実技、演技、演出にも目が配られてい
るところが偉いと思っています。

あとは例えば、田中允さんの跡を継いで、番外曲等の集大成
を出したいですね。以前、丸岡桂の『古今謡曲解題』（一九一
九年）補訂版の仕事をやったでしょ。あれは完曲八百三十二番
の解題、それを増補して三千番ぐらいの出そうと思っていま
す。あの補訂版も品切れで、それを再版しようということになっ

ているけど、折角の機会ですから、付録を全面的に改訂し、充
実させようと思ってるんです。丸岡桂が観世流改訂謡本刊行会
を設立して、謡本を出版してから、去年でちょうど一〇〇年だっ
たので、本当はそれに合わせようと思ってたんですけど。

勝又 僕は四月からやりたいこといっぱいあってー何を言われ
ても「じゃ、四月からな」とかって（笑）ー、やりたい仕事を
机の前に貼り付けてあるの。八種類あって、一年に一つとして
八年かかる。第一次一〇年計画だね（笑）。で、一〇年たつた
ら、また第二次計画を立てるの。詳しくしゃべるといろいろ具
合悪いんだけど、ま、一つだけ言おうか（笑）。日本には井伏
鱒二論のいいのが一つもない。これは僕の仕事だと思ってるの。
堀江 そういうことも言える。これまでの井伏論は、開高健な
どの交友の中の井伏観察がよく、優れた論がないからね。

勝又 学者の井伏論はどれもひどい。で、これだけは僕がやら
なくちゃと思ってる。例えば、井伏は『山椒魚』を一四回改変
してるの。そのやり方に井伏らしいところが見えるんだ。おも
しろいよ。

堀江 全集で言うと、一頁半ぐらい削つちやつたからね、最後
の版で。そうしたら、評価が違ってくるんですよ。

勝又 仕事は八つだけど、遊びたいことは八〇ぐらいあるかな
（笑）。子供の頃の、あれになりたい、これになりたいってのと
同じ。ただ、繰り返し考えているうちに気がついたんだがね、
子供の時は「なりたい」「今はただ「やりたい」だけ（笑）。子
どもの頃は、西野くんじゃないけれど、絵描きにもなりたかつ
たしね、音楽家にもなりたかつたし。

西野 僕はこれから描こうと思ってるの、原点に帰って。お金はなくなるけど、時間はあるかもしれないと思って（笑）。

堀江 いやいや、これからは時間の方が大切だもの。

西野 行きたいところ行って、描きたいもの描いて。あとあんまり言えないけど、できたら能を作りたいとも思ってるね、一九八〇年に出た平塚武二の童話『玉虫の厨子の物語』を題材にして。間狂言ももう考えてある（笑）。だから、できれば創作もしたい。

堀江 勝又さんは小説はどうなの。

勝又 案外、ひよこつと書いたりするかもしれないけど（笑）。限りなく小説に近い評論を書きたいと思ってるの。小説そのものをやろうとは思わないけど。

西野 できないんだけどね、僕は益田先生のようなものを書けたらいいなあと憧れてたなあ。ああいう学問。実証、かつああいうこともできる学問。授業も面白かった。

勝又 そうそう、憧れだったよね。益田勝実さんの学問みたいの、やりたかった。

堀江 あの人、自分の家の庭で万葉の植物を植えてて、授業に持ってきてー僕はそこに出てはいないんだけどー、教壇の上に乗っちゃって、「これがこの万葉の草なんだ」と熱弁をふるう。おかしいよねえ（笑）。

西野 同僚になつてから、教授会の時、「西野さんにいいもの上げましょう」と言われて、「何ですか」と聞いたら、定家葛の苗だったの。「これ、どうぞ植えて」って。私は、定家葛のイメージとしてじめじめしたものを能の『定家』で感じていた

から、あんまり日の当たらないところに植えたら、ちっとも伸びない。で、今度は日の当たるところに植えたら、繁茂して繁茂して。今、冬でも青い葉が残っている。四月か五月くらいに芳しい香りをさせるんです、毎年、薄黄色っぽい花が咲いて。益田先生からのプレゼント。

勝又 去年の九月、国際日本学で熊野神社に行つてさ。椰の木がご神木で、その下で葉っぱ拾つてさ。そしたら、街路樹にも椰の木がざーっと植わつてて、がっくり（笑）。でも一技もらつてきたの。で、うちの花瓶に挿したんだけど、葉がまだ青い。なるほど、ご神木なんだなあ。初め五、六枚あつた葉が、今も二枚ほどちゃんとそのまま。

西野 私の場合、それ以来、定家葛というか、能の『定家』に対するイメージが変わつちやつて。むしろ、こういうのがいいのかもしれないと思つて。いつも馥郁たる香りをしていて、切つても切つても生えるんです。

勝又 定家ってそんなにしぶとかつたんだ。

西野 そうなんです（笑）。

両先生からのメッセージ

堀江 お二人は、大学、学部と日文科について、将来の展望が何かひらけて見えますか。

勝又 僕はね、法政は時代を見ながら進んでいくところをいつも持つてるからね、そういう意味で、時代遅れにならず、てんやわんやしながら進んでいけると思つている。

西野 「てんやわんや」が大事なんだと僕も思いますね。もつ

と雑然というか、エネルギーがある方がいいかな。ただ、さっきの話のように、日本全体の文化度が下がってきてるからね。

勝又 大衆化社会だから、しょうがない。昔おいしかった頃のアイスクリームは本物だけど、今はラクトだから(笑)。いつでも簡単に食べられるけどね。ラクト学生、ラクト学者(笑)。

堀江 あなた方から、学生や教員に対するメッセージはある？
勝又 みなさん、早く大学を辞めて勉強しましょう(笑)。

堀江 文学部自身が「遊びの学部」だから、本当は、遊ぶ楽しさを学生たちが知ってくれなきゃいけないんだよ。だけど、遊ぶためにはものすごく知的な教養がいるんだ(笑)。

勝又 「遊び」の概念が、堀江さんと今の学生では全然違ってるから(笑)。彼らについていけないよ。

堀江 西野さんはどう？

西野 どの場所においても、世阿弥の言うところの「離見の見」を忘れないでほしいということかな。自分を客観的に見つめてほしい、演じている自分を見る自分というのが大事じゃないのかな、そんな気がするね。

堀江 今日は長い時間、どうもありがとう。

注

(1) 西野先生によれば、後年、益田勝実先生が下さった『版画は風の中を飛ぶ種子』(坂本小九郎、筑摩書房、一九八五年)に、西野先生の中学時代の版画が掲載されているとのこと。

(2) 『日本文学誌要』第二五号(一九八一年一月)〜第二八号(一九八三年七月)に掲載。

(3) 「文芸コースの十年とこれから」(日本文学誌要 第七三号、二〇〇六年三月)。